

ペン俳句会 句会報(第三六五号)

令和七年一月九日(木)

兼題『三が日』、席題『初』

句会を、昨年十二月と同じ場所で開催。出席八名。投句八名。(欠席は金魚姫さん。)

松田 一文字

野に降りし光の粒やけさの霜

白妙の巫女の装束初詣

さはさはと竹の葉ぬらす霰かな

しぐるるや雀逃げこむ藪のなか

献立の苦労もなくて三が日

寒鯉の身じろぎもせず泡ひとつ

宮原 風

石路の花遺言状を大まかに

初詣人波に居て一人かな

頌春やヘルパーさんの聞き上手

梵鐘の余韻の中の初詣

平らかに生きて身伸ばす冬至風呂

三が日過ぎて一人の茶粥かな

大津 そうかい

撫で牛の鼻の燦めき初詣

寒風や絵馬重畳と揺れ僅か

寒暁や朝靄溶けて富士の影

三が日過ごせし孫の振向かず

新春や忘れて遠き初心なる

虎落笛湯船なかなか抜け出せず

志村 良知

梅檀の実空に満つ廃校舎

強霜や犬の蹴散らす芝光り

三が日お家の作法蘇り

川霧に光の困む己が影

舞獅子の金の大口祝儀喰ひ

初茜風の湾口巡視船

新田 ゆふき

冬日影暖簾分け入り栗菓子屋

一文字構えの銀扇初稽古

三が日籠りきれずに商店街

凍て風や一族十墓墓じまひ

しばらくは椀つつく音寒蜩

木曾路来て山はここまで吊るし柿

中村 晃也

正夢となりし初夢入院す

灯す家火灯さぬ家松の内

消しゴムで消せぬ過去あり初日の出

一人身や餅を余せる三が日

天までの棚田あまねく初日の出

少年の力及ばず風狂ふ調

長尾 進一郎

年玉の額決め兼ねて子らを見る

歌留多取り子に譲らうか青畳

やり残し数々積みて歳変る

獅子舞に頭差し出し幸貴ふ

波ひとつ立たぬ川の面冬の夕

正月や会ひて驚く子の背丈

安藤 晃二

初暦に母校の校旗翩翩と

数の子の旨さに負けて御酒を乞ふ

眩しさは既に峠の初日かな

燦然と明けの明星初茜

今昔や街の静けき三が日

一椀の雑煮小さ目三が日

西川 知世

輪飾の小さきを祝ふめでたさよ

福寿草置かれ手荷物預かり所

いっとうと高枝に鳴き初鳥

横浜や船笛月へひとつ鳴り

雑踏来て吊るす背広に冷え残り

雑煮祝ふお国自慢もその中に

次回は令和七年二月六日(木)。兼題は季語「節分」(松田一文字さん出題)、席題は西川知世さん出題の「立」です。

季語を学ぶ 初学にかえって

西川 知世

節分の風に賑らむ夕餉の灯
節分の雪の精進落しかな

井上康明
手塚美佐

二月の兼題「節分」は時候の季語。傍題は節替り・節分（せちぶ）。節分は立春の前日で、季は冬。明日からの春を待つ心浮き立つ気分が含まれる。江戸時代の俳諧にもたくさん句が残っている、立春の前夜に社寺で行われる祭儀を節分祭といって、追儺（悪鬼を払い疫病を除く儀式）が行われ、大切に守られてきた。豆撒きや柵を門戸に挿すことなどは、陰陽道で古くから節分を重んじる行事だが、近世、民間に広がり、節分の行事として盛んに社寺で行われるようになったと書かれている。手もとにある歳時記の江戸時代の句にも古さを感じずに鑑賞できる。不思議な季語である。

ちなみに、追儺・おにやらい・なやらい・節分詣は歳時記の行事の候の季語。

節分に空も豆うつ霰かな 作者不明

節分のひらぎはわきて冬木かな 立圃

節分は我年とひに来る子哉 猿雖

節分や鬼もくすしも草の戸に 高浜虚子

節分や肩すぼめゆく行脚僧 幸田露伴

節分の高張立ちぬ大鳥居 原石鼎

節分や家ぬちかがやく夜半の月 秋櫻子

送らるる節分の夜のよき車 星野立子

節分や田へ出て靄のあそびをり 森 澄雄

節分の鬼追い出して早寝せり 坂口良子

節分や心の裡に小鬼住む 関 恭子